

「誰だ！」

と銀は振向いて、

「野郎！ 三太だな、餓鬼ぢやア食足りねえ、手前が對手だ、二貫ばかり俺に貸せろ！」

「冗……冗談を」と身を引いて、

「いつもお前返した例がねえぢやねえか」

「ぢやア貸さねえと云ふんだな、面白い、借りめえよ、其代り、手前あの餓鬼を庇護つたゞけの事をしろ、多額い事は云はねえ、よッ譯つたか」

「困るな、直ぐにこだはりやアがる、手前もいゝ加減にしるよ」

「何を好加減だ！ 餘計な事は云はずともだ、早く出すものを出

せ！」

「だつてそりやア、お前、無理ぢやアねえか」

「何が無理だえ」

と肩を衝突けて、

「さア、来い」と腕を捲る、

「出すよ、勘忍してくんねえ、全體若干出しやアいゝんだえ？」

「俺が指圖するまでもねえや、ありツたけ出しちまえ」

「追劔だな」と小聲、

「これつさりだ、二貫八百！」

「ハ、ハ、ハ、ハ、客齋め！」

銀は三太の手から受けて、腹掛けへざらりと入れたが、

『胸糞が悪いや、矮、親爺が歸つたら、さう云へ。銀は素手で歸つたど、いゝか、此次親爺の居る時を狙つて来て、うんど飲んでやるからな……………』

ぞろりと戶外へ出たが、角の呉服屋の前を通ると、瀧のやうに懸つて居るメレンス友禪、振向くと、立ちながら鼻をかんだ。番頭は算盤の頬杖から、

『おい、馬鹿な事をするぢやアねえか！』

聲に應じて、銀は土間へ、逆身の肩を簪かして、屹とばかり睨み据へた。

『銀さん知らねえか！』

『へッ』と番頭へごもどして、

『銀さんでしたかえ』

『俺なら什麼しやうと云ふのだ』

『そんならいゝけごもね』

『よくねえ！』

と框へごつかり。

『俺がああ鼻をふいたのが悪いと云ふのだらう、悪いだらう、悪きやアいつその事皆鼻をかんぢまはうぢやねえか！』

メレンスをずるりと引く。

『待つとくんせえ、ね、ようがすかえ』

懸硯の抽斗から、白いもの一個二個、袖の下から搦ませる。莞爾として、

「済まねえ、番州！」

後へ一足引く拍子に、往來の人の足をぐい！

「酷い人だな」と濁つた聲。

くるりと銀さん身を返して、

「何が酷え」

羽織の町人銀次を知らず。

「今俺の足を踏だのはた前だらう！」

「違ひねえ、踏んだ！」

「謝罪つたらい、ぢやねえか」

「生意氣なことを云へ、手前こそ謝罪るのが至當だ」

「何？」

と眼角を立て、詰寄るやつを、銀さん透さずとんと衝いて、

「巫山戯た真似をしやアがるな」

胸倉を把るよと見えしが、大地へはたと投げ出した。口惜しがつ

て羽織は下駄を、搦むと直ぐに起き返つて、

「野郎、からしてくれるは！」

微塵になれど打下す、其手を把つて捻上げた。

「ハ、ハ、ハ、態を見ろ！」

向ふへ烈しく突放して、

「いづれまた會はうよ」

帛の影から番頭は羽織を呼んだ、而も外へは聞えぬ程。

「、、、ですぜ」と眼で知らして、

「悪いやつに足をお踏まれなすつた」

羽織は聞えたか、聞えぬか、口惜しさうに衣服の泥を拂ひく、
銀次の影を見送つたが、

「警察は意氣地がないね！」

「彼奴にやア敵ひませんや」

大股に歩行み去る銀次は、辻を彼方へ曲らうとして、露店の帽子
賣が荷を擴げたのが癪に觸る。嘎と唾を大きく吐いて、陳べてある
帽子の上、木の葉の上でも渡るやうに、容赦なく踏んで通つた。

「もし！」

と帽子屋憤になつて。

「品物を什麼する積だ、明旨め」

「盲だ、この通り眼が開いてるんだ、手前の方が餘程盲目だ！」

「小癪な事をぬかすなえ」

「ハ、ハ、ハ、手前怒つたか、面白え、往來は人の踏んで通るやうに
出來てるんだ、其處へこんな邪魔なものを陳べやがつて、一體こり
やア何だ？」

「帽子ぢやねえか」と聊か怯ぢて恨みの眼光。

「帽子だ？ 箆棒め、これが帽子かね、釜敷のやうなものを列べや
がつて、全體誰に斷つて此處へ店を出した、それから聞かう！」

「誰に斷はつたつて、仕様がねえな、まゝいゝや、踏まれたなア俺
の不運と諦めやう、いゝから行つて下せえ」

「いや行かねえ、はんまな事は俺ア嫌えだ、店をしまらうか、帽子を

皆俺に踏せるかだ、碌でもねえものを列べやがつて！」

『まアいゝつて事！、店をしまうよ、踏まれちやア商賣にならねえ』

『さう出りやア勘忍してやらう、これから氣をつけるがいゝぜ！』

『大きにお世話だ』と小聲、

『折角踏まれねえ要心しねえよ』

捨科白に溝の中へ、手頃の石を轉ばし落すと其處は質屋の窓下であつたので胸算用の禿頭へびしやりと泥が消飛んだ。鐵の櫃子の間からぬつと眼鏡の顔を出して、

『悪い悪戯をするぢやアねえか』

『何？』

と銀さん、また眼に角、

『何が悪戯だ、俺が甚麼悪戯をした？』

質屋の親爺。と見て凹んだ。

『銀さんか子供みたやうな事をするぢやアねえか、俺ア亦誰ぞ近所の餓鬼の仕業かと思つたよ！』

『可笑しな事を云ふぢやアねえか、近所の餓鬼と俺と什麼違ふね』

『また始めたぜ、さう横車を輓くものぢやアねえ、天保爺だ、大目に見るさ』

『勘辨出来ねえね、俺が溝泥を撥かして悪いと云ふなら謝罪もしやうが、餓鬼と同様に見られちやア俺の顔が潰れらア、泥が撥ねるのも此窓があればだ、破壊してくれべえよ！』

戸袋へ諸手を懸けて引剝がうと悶くのを、親爺は周章して制めながら、

「な、これだ、この通り頭を下げらア、勘辨してくれ、その代り夕方になつたら何處かで一杯やらう、え、銀さん、其處等で勘辨したら什麼だ」

「什麼も斯うも無え、飲ませりやア格別だ、確かり利食の算當でもしなせえ」

びいやりと障子の締る音、帽子屋はもう荷をしまつて影さへ見せぬ。銀さんはどほんとして、二足三足。足下から喧ましい物の響きに、驚いて飛びさると小さな犬の足を踏んだのだ。

「やッ、此奴ア参つた！」

銀さんが歩行いた三時間、其害を蒙つて詫の一言を聞いたのは、僅に小犬一疋であつた。

田園三日常生活

其一日

筆尾捨郎は久しい以前から田園生活を夢んで居たのであつたが、何や彼や事情の許さぬところがあつたのと、最愛の妻ぐら子が餘り進まなかつたので、荏苒月日を過したのであつた。

けれども捨郎は飽くまで此素志を貫く可く妻のぐら子に田園生活の經濟である事や、趣味の深い事や、乃至は個人と個人との間に懐かしい關係のない事まで説いて聽せたので、ぐら子はまた趣味の深い

事も個人の關係が懊惱いか、懊惱くないかど云ふ事も、餘り多く耳を傾けなかつたが、何より經濟と云ふ話に動かされて、漸く得心したのが、今から丁度三日前！

何でも海が見えて、富士を仰いで、近所に清い流れがあつて、餘り遠くない所に醫者が住んで、汽車道に沿ひながら、人の乗降りしさうもない淋しい停車場も近所に欲しい。野菜も自由なら、新らしい肴も安く買はれるやうなところを探し歩いたが、理想と實際とは相會ふ事なく、そんな都合のよい場所は大方富豪の別荘か、旅人宿が占領して、捨郎の力には及ぶ可きやうもないので、汽車道から一里程も引込んだ、海も見えねば、富士もない、酒屋に三里、豆腐屋へ五里と云ふ片山里に一軒賣屋のあつたのを、月賦で引取つて移

り住む事にしたが、其一日は夫婦で荐に田園の樂さを誇り合つた。

捨郎『ね、いぢやないか、此の青田を吹いて來る風と云ふものは、東京で物干を吹いて來る風とは違ふね、ほら蛙が鳴き出した、第一あの向ふの丘の松の振が氣に入つたね、月の晩などは屹度見飽かぬ眺めがあるだらうと思ふんだ』

ぐら子『だつて、儂、それ程に思ひませんわ、海でも眺めるとか、富士でも見えれば、また晴々して好いでせうが、田圃ばかりぢやア、何だか物足りないやうな氣がしますわよ』

捨郎『さう云へばそれまでだが、お前だつてあの物干と物干との間に挿まつた家と、今の田の中と何方が居心がいゝ位は譯りさうなものだな、そりや富士が見えて、海も瞰えれば此の上はないんだが

な、考へて見るとそれは人間の慾と云ふもので、また俗物の考へさ、かうしたところに住んでても、結句田園生活の本意ではあるまいかと思ふのだ』

ぐら子『さうですか知ら、何しろ未だ来たばかりで譯りやアしなけれど、それは先の家と比べたら甚麼に暢氣でせう、近所はなし、水を汲むつても、朝晩七面倒な挨拶なんぞしないで済むし、まアくゝいゝとときませうよ！』

捨郎『お前がさう云つてくれれば僕は實に嬉しいのだ。勘くとも田園趣味を味へば、もう二度と紅塵萬丈の東京へなんぞ出たくはないよ、そら、今度は蟬とお出でになつた。此奴は少と喧しくつて困るな！』

ぐら子『もう、何です、近所に見る人はなし、戸を締めて寝ないでもよござんすわね、どの位、ま、手が省けるでせう！』

捨郎『どうも、お前のやうに、そんな方面から田園生活の趣味を説かれちやア叶はんね。然し、もう一週間も経つ中には追々眞個の趣味も譯つて来るだらう、何しろ快い心持だ！』

其二日

昨夜遅くまで田園生活の美しき事、樂しき事など語りつゞけて、今朝は晚いお目覺めなり。ぐら子夫人と捨郎どが、其新宅に朝饌の膳に向つたのは午前十時！

捨郎『随分よく寝た事だ、舊の住居でこんな眞似をして見ろ、またあの糊屋の婆め、若夫婦にも困つたものだし、なんてぬかすだらう、

けれどいいね、この朝景色。畑から畑、田から田へとあの霧の引いて行くところが妙さ」

と云ひながら、捨郎一頁膳の上の小鉢を見廻したが、

捨郎「これは恐れ入つたね、いつの間にかこんな物を仕入れたえ？

生卵は恐れ入つたね、太閤一夜の城と云ふ話もあるが、まさか人間が卵子を産む筈はあるまいし、今更お前の機敏さに驚くね」

ぐら子「吃驚なすつたでせう、儂はもう田園生活が好きになりましたの、此卵子だつてさうですわよ、今の事儂が水を汲みに井戸端へ行きますと、あの向ふの百姓が水を貰ひに来て、こんな卵子をお禮だつて十個も置いて行くんですものね、それもいゝとして、明日はまた薑を掘つて来て上るつて云ふんですもの、田舎の人つても

は、什麼してあゝ心切なんでせう！」

捨郎「だから東京のやうな輕薄な者ばかりと交つて居ると、自然田舎人の朴訥が慕はれるのさ、兎に角御馳走にならう」

と捨郎はぼんと卵を膳の縁、皿へ映つた月をつるりと吸つて、

「さうだ、牛乳と云ふ一事を忘れて居たが、明日あの百姓に聞いて見るがいゝ、此處等だつて、牛乳を飲む人がないとも限るまい」

ぐら子「さうでしたつたね、牛乳さへ毎日配達があればこんな暢氣なところはありませぬわね！」

捨郎「愈々田園生活の趣味が頭へ入つたと見えるな、今更思ふともう二三年も早く引込めばよかつたよ！」

ぐら子「其中にお米をくれる家が出来ればなほいゝけれど……」

捨郎「ハ、ハ、ハ、ハ、さう慾張つた事は云ふ可からずだ、今に僕が作つて見せるさ、詩を作るより田を作れだ、そこまで行かなければ未だく田園生活の眞意義は解すべからずさ」

ぐら子「此分で行くと、まつたく月拾五圓もあれば樂に暮らせて行けますわ、少しづつでも残れば樂みですわよ」

捨郎「此景色に對して米價を説いては困るな、詩中の家となり、畫中の人とならなければ、田園の趣味を解する事は出来ん、然し、あの新體詩家の董星に見せたら、嘸羨ましが事だらう！」

捨郎は膳を離れたが何とは知らず手持不沙汰だ。其儘椽へ肱枕、近き翠巒に對して見たが、思ひ出したやうにスボンと起きて、

捨郎「さうだ、新聞が來ないんだな、何だか淋しいと思つたよ、

なんぼ世間を遠ざかつたと云つて、此奴ア少し閉口するな」

と唧くと、ぐら子夫人は台所から大きな聲。

「新聞代を積んで置いても年に四圓近くは残りますわよ」

其三日

捨郎は退屈さうに寢そべつて、何かの詩集を益らなさうに見て居ると、ぐら子夫人は縫かけた物を下に置いて、これも益らなさうな生欠伸。此處へ來た日と同じ山、同じ田圃、同じ蛙の聲、同じ向ふの丘の松！

捨郎「田園生活も趣味が深い！それは趣味がないではないが、牛乳配達も來なければ、新聞が二日も三日もうろ抜いて來るなどは閉口だ、其に友達はやつて來ず、此方から泊りがけに行く譯にも行

かず、毎日／＼同じやうな田圃を見て、同じやうな蛙の聲を聞かされるには殆んど閉口したね。さうかど云つて何か傑作でも出来る事か、餘り淋し過ぎて手につかずと、田圃生活もかうなつて見ると餘りにいゝものぢやないよ！」

近くに厩があるかして、ふんふんど寄せ来る蒼蠅を團扇でばたばた拂ひながら、捨郎自暴になつて、ぐら子夫人の方を見る。

ぐら子『ほんどですわ、貴郎は田圃生活は經濟だ／＼と被仰つたけれど、經濟どころではありませんわよ、一昨日の卵だつて、昨日の薑だつて、大變高いものについちまつたんですわ、何故つて、貴郎かうなんでせう、昨日あの百姓が生薑を持つて来て何を云ふかと思つたら……………」

お宅さまは結構だ、お金がおありになるから、大層な召だ、お引越の時分にも家内どもさう申した事だが、あの中の御平常着でも一枚家があれば嘸好からうツて家内が羨しがつて……………」

なんて云ふんでせう、卵子や生薑をなんぼ水の禮だからと云つて只貰つて置く譯にも行かないところへ、さう謎をかけられて見ると遣らない譯にも行きませんから、どう／＼儂の銘仙一枚無くなるやうぢやア餘り益りませんからね、貴郎經濟どころぢやアありませんわよ！」

捨郎は黙つて聞いて居る。ぐら子夫人は尙語をつぎ、
ぐら子『それに貴郎にしたところが毎日／＼同じ田圃や、同じ山を見ていらしつたところで、餘りその深い趣味とやらもなさうぢ

やありませんか、これからまただん／＼暑くなつて来て、東京から大勢の友達に舞込まれて御覽なさい、それこそ経済どころか田園趣味も何もあつたものぢやアなからうと思ひますの！ それよりかいつそ元通り東京へ歸つて、山の手へ住みさへすれば、結句経済にもなれば、貴郎も其田園趣味とやらが養へるだらうと思ふのですの、もう、もう、もう／＼、儂田舎は嫌ひになりましたの！』

どぐら子夫人此處を先途と説き破る。根が意志の弱い捨郎なれば、何だか急に田園生活が可厭になつたり。

捨郎『それも餘り極端だが、何しろこう、世間と隔絶してしまつては、時代に遅れはしないかとも思ふのだ、考へて見ると、田園生活は未だ少し早過ぎたよ！』

眺めて、
ど四日目にはまた元の東京へ逆戻り、物干の月を庇の長い窓から眺めて、
ぐら子『矢張此處の月の方が陽氣でいゝね！』
捨郎も無論同意。

『眞個にあんな淋しい思ひをした事はなくつてよ！』
田園三日生活とは捨郎が何かの雑誌へ書いた記事である！

糸 蒔 蒔

客は三十二三、ぼやく／＼のふけ頭を手入もせず、百日鬘の如く生し、普通より大きな眼を青く光らして疎らの鬚をおやかしながら、
荐りと對妓の顔を見る癖あり。

對妓は年頃十七か八、至極おつどりした取なし、丸ぼちやの愛嬌たつぶりなれど、言葉は信州の在方にて、折々妙な訛ありと知る可し。

客「あの男位づぼらな太平樂な、そして薄情な男はありやアしねえ、俺も長年交際つちやア居るが、いやもう愛憎盡かしさね。」
と異に友達の缺點を云ふやつなり。

妓「あらあの人ね、初會から妾不好で堪らねえ、初めて會つた時から、什麼も好かねえ人だと思つたのよ」

客「誰があんな男を好くやつがあるものか、廢しねえく、そこへ行つちやア俺だぜ、俺はね一體涙つもろくつて仕方のねえ性だ、お前のやうな人をこんな所へ置くのは惜いものだ、俺の所へ来て、

子供の世話をしてくれたらと思ふとね、俺の家も都合がよし、お前も樂になるだらう、什麼だ俺の家へ来るやうな都合にしては？」

と猫の子でも引取てやるやうな氣で居るなり。對妓は天から謔と思へど、こんな向ふ見ずの男の事故、手酷く肱鐵を食はしたら、甚麼ことをし兼ねぬものでもなしと、

妓「そうして貰へば難有えだね、けども妾此處の家に借金もあるだから、一寸の金ちやア脱けられねえし、かど云つて自由廢業も可厭だからね。」

とはいしくも逃げを張つたりけり。

客「其心配はいらねえや、俺かう見えても百や二百の金には困らねえ男ス、三百となつちやア少し凹みの形ちだがね。」

妓「それが丁度三百ばかりあるのよ、とても出しちやアくれさつしやるめえ。」

客「いゝよ！」

と咽み込んで、

客「いゝよ、三百位の事は什麼でもなるわさ、大船に乗つた氣で居

なせえ！」

大風呂敷を擴げて歸つたまゝ、舳の道！其後へ悪くいはれた友達が

通つて来る。

友「あのでれ助の云ふ事を眞に受けると飛んだ目に逢ふぜ、いゝ

加減にあしらつて置かつし！」

妓「妾は初つから欺されると思つてたゝよ、何がしど、あんなひ

よつどこに欺されるものかよ、行くんならお前さんどこへ行くア。」

客「さうか、難有え、俺のどこへ来て見なせえ、それこそ下へも

置かねえわな。」

妓「何處へ置いて下されるのね。」

客「置場所かえ、質にでもあぐさ。」

妓「そんなら、かうしなさる、什麼で流れの身ぢやアもの、流す

なら、此處で流しなされ。」

客「そして、錢の足りねえ時は？」

妓「えゝてこと、妾には三百がついてる！」

物干竿

『今日もまた上天氣だ、うんと重荷を脊負されの、夕暮まではお勤めか、いやはや藪に居た中の事が思ひ出されて、涙が續れるわ!』
 梅の枯枝から四目垣の上の楓へ渡した物干竿、先生頗る健康を害したと云ふ調子で、ぐつとそりかへると、露がばら〜!』
 『全體この霽といふやつが氣に食はねえの、此奴がうまく氣を利かせてくれりやア、俺も一日樂が出来ると云ふものだ、什麼だ霽さん、降る積りかえ、霽れる積りかえ、水先案内ぢやアねえが、朦氣にやア大きに恐縮さ』
 『霽さん少しかちゐいて、徐々逃げ仕度にかゝるな、東の方がぼつと明るくなつたかと思ふと、朝顔めおいでおいでを極めやがる、其癖天道様お出ましになつて見る、直ぐにぐにやりと參るだらう!』

臺所の戸が開いた。お慶殿お目覚めかえ、また例の臺が護謨球を抱へたやうに、大盥を擔ぎ出して、ちやぶちやぶとお出でなさるだらう。
 『そうら始まり〜、あゝ石鹼を使はれちや堪らねえの、今日で三日目のがもうあれだ。切餅を豆にする工夫を御承知かえ、おツとさうぼちや〜、やられちやア、周圍は迷惑だ。其癖垢は落ちやアしねえ、浦鹽艦隊の狀報で、只今砲聲を聞くか、音ばかりで埒アあかねえ、ちどてきばきやつて下せえ、あれよ、冥利を知らねえにも程がある、其所へぶちまける位なら、何故垣根の朝顔に遣らねえのだ、きび〜するやうに搾つたら此方へ出しなせえ、竿先生に待兼だ』
 故紅葉先生はおさん殿を形容して曰くさ、兩の腕が赤煉瓦で、大

股が空氣枕とある。何とうめえ事を云つたものさ。燃りが戻つたら、ぐいと其赤煉瓦を兩袖から突込んで、ばさりと、一つさばいて、いよ／＼三叉木とお出でになる、竿先生は身輕にひよいと三叉木へ懸つて、

『あゝ、氣味が悪い、お前の浴衣かえ、もうちツときび／＼するやうに挫つて下ツし、それにまた破けた肩當が俺の節へ引か／＼つて、先きへ行かねえはさ、右の手でぐいと引いたり／＼！』

次が奥様のお召、其次がお嬢様の！これが嬉しい、月に薄の模様、もうお馴染さ。裏の赤いのが、何となく有難くてならねえ。

『さう邪慳に引張りなさんな、切れてしまはアな、あれさ生搾りのやつを平手でぼん／＼叩かれて堪るものか、何故またお嬢様の中から

懸けねえのだ、第一自分のから懸けるなご、云ふ事は奉公人にあるまじさだ、お嬢様のお召、嘸御窮屈でござんせうが、霰らく御忍び／＼！』

懸けたは／＼、一枚、二枚、三枚、四枚、かうやられては、竿先生少しく面喰ふ。(ぼたり／＼と落ちる霰が草の葉の上に乾くと、風が来てふはりと煽る。)

『真中はい、匂ひだが、頭の方がいやに臭いぜ、腋臭の古浴衣と来ちやア真平だ、風めも真中から吹くやうにしる、いやに尻の方から吹くので堪らねえ、頼むからおだやかにやつて下ツし』

もう乾くな、午前十時、三時間ばかりにして其任を果した先生、今度は奥様の手にか／＼つて、折角のお嬢様にも、もうお別れかえ、

おさん殿の古浴衣が癩に觸つてならねえから、ぼんど一つ跳返ると逆さまにばかり。奥様は、

『おや〜お清、大變なことをしてしまつたよ、お前の浴衣が泥だらけ！』

するとおさんめ、面を膨らしたが、

『おやまあ、この竿はいつでも撥ねる癖があると見えて、今度で二度目でございますわ。』

と来たものさ、馬と間違へちやアいかねえ！

おさん須らく考慮せよかね、オツと、また来たな。臭え！ いや〜悲境に陥つたぞ、まだ此位なら古浴衣の方がましさ、襦袢と來ちやア、これ位不景氣なものねえの、それも洗はずに干されるに

やア閉口するよ、あゝ堪らねえ、緋もあれば、縞もあり、中形もあれば金巾もあると云ふものか、これが一列一體に臭いと云ふもので、誰だつて鼻をつまゝアな、さつさと乾け〜！』

風蕭々として襦袢を吹く！ 元祿時代の小袖幕を乞食芝居で見たと云ふ態だ。あゝッ、重なつちやア困る、乾きが悪いと、餘計心持ちが悪い、ブツと離れた〜、(竿先生くるりと身を捻る！)

『日が強いから、もう乾いたやうだよ、早く取入れておくれよ！』

と奥様のお聲が懸かればもう此方のものさ。さ、ブツとお外し下さい！ 背中へ引かゝる、どうしてもこの襦袢と云ふやつはへばりつきたがるので困ります、つるりする〜、あゝこれでさば〜した。どれ一つ鼻でもかんでやらう。(竿先生蟲喰の穴から露を零

す)

『おやく、もうこれで役済みかと思へば、まだありますかえ。拭いて下さる！ちつとは手入れをして下さるも善根でさア、本磨きになると、ブツと竿振が上りませう、襦袢を干すのは勿體ない！お嬢様のお召専屬と云ふことに願いたいね、いかゞでげせう！やれやれ、蒲團でげすかえ？ふはりどやつて戴かねえと折れませう、かう立てつゞけにやられちやアごんな竿だつて堪つたものぢやねえ！』奥様、三叉木を持餘してよろしく！)

ずつと引張ると、それ！（びしり！）

蒲團も夜着も泥まぶれ。『こんな竿つちやない！』と奥様は大御不興！翌日は竿先生半分にへし折られて庭の隅へばかり。あゝ老朽

か、先生も樂でござらう。

半响侯爵

酔へるにはあらず、肌寒き風に色蒼く、疲勞れし足は草鞋の緒に食はれて、われは春波、小星の二子に扶けられつゝ、河崎停車場前の茶屋に憩ひしは、空いと曇りて、雪にもやならん氣色の、正月十七日午後四時のことなりき。

黒の山高帽と縮緬のお高祖頭巾との一組は奥の六疊に入て憩ふ。足袋裸足に草鞋ばさのわれ等は店先きに腰うちかけて、流車の到るを俟つ。

餘りに好き客とも見えざれば、茶と粗末なる菓子とを出しつ、主

人は物愛げに見えたり。想ふに茶代も得置かざる可しと、始めより踏み倒せしものか、停車場には早く人の群をなしぬ。

合乗車走らせて、周章しく駆けつけし二人の酔漢は、手に笹折と洋傘を携へて、そこに下車せしが、一人は熟柿の臭いや高く、一人は泥の如くに酔ひ潰れたり。

何事かいひ罵りて、一人は仰向けに倒れたるが、一人はまたそを助けんとして蹴き轉びぬ。

制すれば喚き、扶くれば倒る、笹折は彼方に飛び、洋傘は此方に落つ、群衆また皆この二人に集りぬ。やがて流車の到る可き時や來にけん、驛夫は出で、この二人の酔漢を待合室へ擔ぎ入れたり。

小星は何をか求むらん、席を離れて、店頭の主婦と叫けり、春波

またやがて席を立ちて、

『君！ 君！ 一番小星を驚かしてやらうぢやないか、俵ち給へ。』

と云ふや、矢庭に群衆の中に紛れ入りて、やがて歸り來りし時は、手に白き切符を握りぬ。白き切符！ 自白す、われ等生れてより或は青き切符を握りて、流車に乗りたることはあり、臍の緒切つて、白き切符を帽子に挿みて、悠々車扉を開きたることなきなり。云ふまでもなし、白き切符とは、一等乗車券なり。

『君、こりやア剛いことをやつたな、この體裁で一等列車へ乗つたら、人が何と思ふだらうな。』

『云ふ勿れ、富豪の御微行さ。』

『うむ、富豪！ 乞食の富豪でもこんな風はしやアしまし。』

『之を歴史に徴す、昔北條時頼はね！』

『大變な時頼が三人寄つたものだ、鉢の木が間に合はないで、摺鉢へ唐辛子を植えて出すやうなことになるだらう。』

『小星の驚く顔が見たいものだ。』

小星はやがて來りぬ。

『何だ、大變なことをするんだな、野人禮に慣はず、一等は少し恐れるね。』

鈴は鳴り渡りぬ。列車は來りぬ。われ等三人は群衆と相紛れて、改札口を出でぬ。赤き切符と、青き切符との間より、偶々白き切符の出でたるに、驛夫は異みて霎らく切符とわれの顔とを見比べしが、仔細なしとあつて、ぶつり切られたる切符は、またわが帽の飾

りとなりたり。人波うつてブリツヂに上り行く後より、われ等は悠然と歩を運びつゝ、

『侯爵になれば澄したものだ。』

『ハ、ハ、ハ、僅かに三十分間の侯爵か。』

『あの儕輩が揉合ひながら下等列車に乗る態が見たいものだ。』

『だから成上り者は困ると云ふのだ。』

白き線を曳きたる列車に乗組めば、中には二人の紳士あり。一人は代議士か、一人は實業家か、異様なるわれ等三人を、過つてこの列車に入りたりとや思ひけん異様の眼を輝かせて、われ等三人を異むの色ありき、されど氣の強きわれ等三人はまた渠等を睥睨して、ピストルを放つ、と云はゞ讀者は驚き給はんが實は正宗の小嚮を扱

きたるのみなるもビストルと云ひ、正宗と云ふ、物騒なることどもなり。驛夫は來りて切符を調ふ、この驛にしてかゝることは蓋し異例ぞ。

酒を呷ぎ、揚饅頭を食り、氣焰當る可からざるに、先きの二紳士は口を緘みぬ。大森驛に來りて、車中また一紳士を加へたるが、其人はわれ屢々太陽の口繪にて、見たることある人なり、曰く某大臣！

有繫に霎らくは車中闕として聲なかりしが、春波は妙に身を捻らせて、

『ごうだらう、新橋に馬車が來て居るだらうか！』

小星もまた鹿爪らしく應じつ、

『家扶の安田にさう云ふて置いたから、屹度來るよ。』
企みたり、半晌侯爵！
いでやわれ其假面を剝いで赤裸々の分際を自白せん。

『電車なら、いつでも俟つて居るよ。』

流車は新橋に着きぬ。人雪崩に押されて、われ等は停車場を出でしが、腹はやがて北山の、春波は馳せて焼芋屋に入り、小星は八百屋に行きて蜜柑を購ふ。半晌侯爵は再び元の默阿彌、寒い夜風を焼芋に凌いで、例の窮屈な書齋には歸りぬ。面白し！
片腹痛し！

門禮者

門禮者と云へば初鶏の聲朗らかに、からりと晴れた朝まだきに、

門松の霜を拂つて、「いやお目出たうござる」と来るが常例だがいやはや我々の家に来る門禮者には随分變つたのが舞込んで来る事だ。いつの年であつたか忘れたが、今から六十年前の丑年では決してない。元旦の廻禮疲れ、七時頃から床に這入つて、早くから夢に落ちた。不圖眼を覺すと戸外の戸をトン／＼と雨垂程に叩く音が聞えて来る。

さア大變、盜賊の初入りとお出でになつた、お目出たうがおぬすつとうと變じては「お互様に」ども眞逆に云へず、さて何と挨拶したものであらうと、いさゝか初氣味悪で、様子を覗つて居ると、戸を叩く間に「おめでたう／＼」と呼んで居る。

かはつた盜賊もあるものだ、お目出たうと聲をかけて這入つて來

るやうなら、屠蘇の一杯も饗應つて歸してやる分の事だと漸く丹田に氣を落ちつけて、懸金を外して竊と戸を開けると、眞晝のやうな月が射してむ其下から、ぬつと顔を出したのは古琴と云ふ男だ。

「何だ、君か、僕は盜賊の初入りとばかり思つたよ」

と云ふと

「まア其方に近いのだ。」

「可厭な事を云ふな、今日は元日の晩だ。して今頃まで門が開いて居たかね」

「いや開いて居ない、叩いたつて聞える筈もなし。また聞えたところ起きて開けてくれる君でもないからね、僕も實に困つたわね」
「さうだらう、もうやがて一時だけ、串戯ぢやない、二日の朝にな

つてるのだもの、誰が開つ放して置くものかな。それから什麼して這入つて来たえ』

『ひよいと門の側の家、あの家を覗くと格子が開いて居て、中の様子覗ふとだね』

『いよ／＼盗賊に近くなつたぞ』

『ま、聞き給へ、誰か一人外へ出て居て、留守番は皆寢言の最中よ。中にやア面白い事を云つた奴があつた』

『何と云つて居たえ』

自分は思はず釣込まれると、

『あゝ正月は好い氣持だが、大晦日は恐れる。』

『何だつまらない、それから什麼したえ』

『其處で一策を思ひつきの大きな聲で『只今』と下駄を片手に上り込むと、其中の一人はひよいと頭を擧げたつげがね『へいお歸りと縫れた舌で云つたまゝ、また寐の五郎さ。其處で悠々と、裏口の戸を開けて、どう／＼門内へ闖入の、君を驚かしたと云ふ譯さ』

『盗賊までには行かないが、慥かに家宅侵入罪は免れんね、然し此處ぢやア什麼する事も出来ない、中へ這入らう。それに滅法寒いから風邪でもひくとつまらない』

『いゝよ、此處でいゝよ、この月を見ながらさうだ、かう云ふものがあるのだ』

と袂を探つて紙包を取出したが、芝の上へ擴げて、

『わざつとお印だが、お年玉の代りだ』

『何だ小殿原が三疋に餅が二切か』

『ど輕蔑し給ふな、さる家の令嬢が僕に贈つてくれたのだ、惜しいながら君に進する！』

『有難う、慥か『年玉や物どりかはす睦まじさ』と云ふ句があつたやうに思ふから、僕からも何か進ぜやう、俟ち給へ、何かあるかも知れなう』

自分はまだ袂を探すと、巻煙草の折れたのが一本。

『これでも進せやう、折れたりど雖も煙草は煙草だ。悠りやり給へ』

『笑はせやがるの上に初の字をつけるど………初笑はせやがるぢやないか、これを悠くり喫んだ日には、口へ初火傷が出来る。初膏』

薬、初濃み、初糜れ、有難くもねえ』

『心細さよ煙草が二本と云ふ歌はあるが、半分ぢや歌にもならないか』

『まア折角の志だ、受けてあかう』と燈木で火を點けて、ふかりと喫うた、風のない空へ煙は輪を描いて舞上る。

『かう云ふ新年でなければいかんよ、いや實に愉快だ』

『なにが愉快だえ、寒くつて仕方ない、家へ這入らうよ』

『這入にも眞闇ぢやないか、此處の方が餘程明るくていい』

『まア屠蘇でも獻じやう、此處で獻酬もをかしなものだ！』

實は自分は寢衣のまゝの寒さに辟易して、歸つてくれの謎々も先方へは通ぜず。

『いや其遠慮には及び申さぬ』

『何方が云ふ事だえ、何しろ寒くて堪らない。君は酒の氣があるからいゝやうなもの、僕になつて見てくれ給へ實に寒くつてやり切れぬ！』

『そろ／＼初泣言と來たな。まあさう云ふ可からず、僕の爲めに君が風邪をひいてくれる位の勇氣がなくなつては嬉しくないよ。僕はまたこんな正月をしたのは始めてだ』

『君よりも僕の方が初めてだよ。そろ／＼初露骨になるが、君は歸るのかえ。歸らないのかえ？』

『そりやア夜の明けるを俟つて御歸館さ。石の上に三日だつて居られるものぢやアない！』

夜明けまでは眞平だ、さア／＼中へ這入らう！』

『その遠慮に及び申さぬ。もう君見給へ、冬の夜の長けれども、鶏が唄ひ初めたよ、ね、遠くに宮太鼓、これを元日に聞きたかつたな』

『元日の朝からこんな事をされて堪るものか、もうそろ／＼お立ちは什麼だえ』

『初追はれか氣が利かねえ、ぢやアお目出度！』
自分の日記を見るとかう書いてある。

『一日より二日に亘る門禮者は古琴なり。芝の上に約四時間の祝賀も生れてより始めてなり。さてまた小殿原三疋に切餅と、巻煙草半分の年玉贈答もこれが始めなり、序に別れ際のお目出度もこれが始』

めなり云々』

想出す、また其時に憊う云ふ句が出来て居た。

元日や二日や粋なお客來。

蜀紅園に遊ぶ

蜀紅園はK O子が草廬なり、草廬にはあらずお館なり。構内三萬坪、梅あり、紅葉あり、山あり、池あり、榎の林あり、菜畑あり、茶園あり、只無きものは表門の表札と柴折戸の片扉となり。

三月五日我等同人太擧して此所に遊ぶ、遊びたるにはあらず、荒したるなり。S I子を促し立て、四谷より電車に搭すれば、車中既にS T、T H、K Sの諸子あり、大久保の停車場を數丁、杉の木立

を以て折廻らせる一構へは、これを名に負ふK O莊なり。

何事にも謙遜なる同人は、誰だ笑つちやアいかねえ。裏門より推参して、S T子の案内に二階に登る。蜀紅園の顔ども云ふ可き額を仰いで坐せば、梅香衣に薰ずとは眞赤の偽り、蕾固ければ未だこゝまでは薰じ來らず、今日は餘程綺麗になり居れりと主人の詞なれど尙雜誌書籍など山の如く疊に積まれて主人の平生がいかに潔癖なるやも推せらる。座にS E子あり、『思つたより綺麗だ』あ、御挨拶なるかな。S S子又曰く『いつもより片づいて居る』S I子側より賛す、『一寸料理屋のやうだね』以て大方は察し得らる可し。盆中の蜜柑また大に笑つて曰く『お客がお客ぢやねえか』あ、萬事休す矣。十歩ならずして富士見台あり、登れば以て雪だらけの富士を仰ぎ、

動かざる水車を蹴る可し。一幅の活書圖は眼前に展開して、眺望云ふばかりなし。T H 子來り、K T 子來り、S T 子、S O 子また來る。即ちオーターシユートを演ず。

眉に睡せざるべからず。水なき所にオーターシユートありや、酒なき所に醉漢は出でざる道理にあらずや。云ふ勿れ文章の妙、雪は鷺毛に似、雲は秦嶺に横はる。鷺毛のやうな温い雪が降る筈なく、秦嶺に横はる棒のやうな雲がある道理なし、此に所謂オーターシユートとは芝の上を轉がる事なり。

何だ益らねえと貶し給ふな、富士見の山凡そ十間、頂上より薙を身に纏ふて迂り落つれば、高さ十八米突を驀直、到底二階から落つるの比にあらず。S T 子三十年若返りして、大に轉げる。T H 子は

燈火を摺つて焚火するに、火は芝を焼いて將に十里に亘らんとす。讒をつけ、四方一間に足らざれば、即ち羽織を脱いで消防に盡す。S 子大に狼狽て、歸去來を呼ぶ、時恰も正午、十疊の大廣間には既に盃盤所狭く、主人の幹旋また平日に似ず。盃を擧げて各行李を開く、鮎あり、サンドウツチあり、握飯あり、膳上の珍味はこれ主人が殊に意を用ゐた料理なりとぞ。食道樂の書中にはなかりし。物食へば腹膨れぬ。再び園中に出づれば、S L 子の鞆、其腰の動かざる事山の如し。

富士見台下にて撮影、S T 子を煩はしぬ。萬綠叢中の紅一點、誰とかなす、N O 子の令妹、いみじうお美しかりき。然らば此山富士見台にあらずして、富士額ならずや。時に佛蘭西鬼を主張したる某

子の胸を叩けば、或はそれ……あゝ秘す可き哉。秘す可き哉。

圓を地上に描いて立つ人、S I 子、I S 子、S E 子、R M 子、軍人 A T 氏、主人 K O 氏あり、S T 子また投ず。大きな坊ちゃん、さるにても無器用千萬、迂る者轉ぶ者頻々相踵ぐ、遂に S T 子の鬼をしてクロンポ踊を偲ばしめ、圍を解いて西へ退却、再び酒となり、座興となる。S T 子を索めて得ず、しなしたり一番槍の功名、早くも子に占められしか、いざとばかり俄に門を出づれば、日の影も稍薄かりき。L T 子には遂に會せず。大久保驛に至りて電車を待つ、一日の清興、以て百年の壽を估ひ得たり。蜀紅園の賜は獨り子のみにあらざりき。翌日相會す、曰く面白かつたね、何ぞ必ずしも藥を東海に覓むるの愚を學ばんや、園は近く二里の園内にあるものを！

百草紀行

何日見ても飽かざるものは眠れる多摩の流れなり。蕭々として石に入る日の秋は知らず、櫻咲く春を此處に訪ふこと一再ならず、ある時は二子の渡に、あるときは青梅の岸に、同じ流れながら、活ける水、死せる淀みの、いづれにも風情はありて、よしや筏の瀬を早み、砂利とり船の底淺くとも、子は御身に憧がるゝこと深し。

日野に子が乗來れる汽車を見すて、たら／＼坂を下れば、一八の塵にも染まず、茅葺の家根古し。淋しく廣き石高道にとりて進むこと約六町ばかり、右不動尊道と誌せる碑につきて右に折るれば、小さき流れの田を縫ひて、堤は長し、こゝにも水車の響きはありけ

り。
青麥の穂は青し、大根の花薄紫に、黄なるは蒲公英か、紅きは玉形か、偶々目につくは筆草ならずや。一里塚の捨草鞋、覆ひかゝる松の根小さく咲ける董の、あはれや雨に色褪せたり。道は此間をうねりつゝ南に奔る。

予はやがて高幡橋の袂に出でつ、見渡せば河原長く水いと長し、陽炎の立つや河原に水車の響また長閑なり。

同行にS I、K T、S Kの三子あり。等しく共に風光の絶佳を賞して歇まず。堤に沿ふて行く事約五町、不動堂あり。規模宏壯、賽者絶えずと見えて、門前にいぶせき旅宿もあり。日野停車場より予等を追ひ抜けし俣幾台か、此處に梶を突いて、茶店の床几に向鉢巻

の罵るは今其客を此堂に送りしなり。

松と楓と、宛然畫の如き山の麓を繞れる道は平坦にして幅廣く、藁葺の家ほつりく、路傍の幟勇々しく、右は高畑の豆の花可愛く、左りは見渡す限り青麥の穂の剣にも似たりけり。薄曇る空の雨にもなりぬべき氣色、枝蛙の鳴く音に誘はれて、爪先上りの山道峻しく、九十九折とも見ゆらん路の、凸凹極まりなければ。同行者皆行き悩みて、木曾の棧道もかくやとばかり、弱き音を吹くもあり。さては咽喉渴きたり、清水だにあらばと云ふもありて、有繋に都落ちの意氣地なさは知られぬ。

嶺に到れば、休茶屋の小蜜柑、鶏卵、鯛など置き列べて客を待てるも、既に嶺にこりはては茶一つ飲まんと云ふものなくて、道を

急がんとしつ。不圖見れば、それぞ百草園の入口、小石を敷ならべたる坂道の狭く右に奔りて、見覚えある生垣の、こゝぞ百草にこそと云へば、能くこそ覺えられ、危くも行過ぎて、疲れし足に二度の疲れを見する事よと、直ちに山上の茶店に入る。

一重櫻散りも初めで、松風の音涼しく、多摩には雪か、照り初むる日に砂利の光りて、四季を一時に見たらん如し。

酒を呼ぶ、肴には鮪の魚田、同じ甘藷の餓ゑたる腹に無味きはなく、忽ちにして骨もとどめず、猪口はまた彼方此方に飛びて、酔餘の氣を吐く事虹にも似たりけり。S I 子は大蝸の如く、K T 子は狒々の如く、予は猩々の如し。獨りS K 子は餘り多くを飲まざれば、其色常よりも蒼く、河童の妖に髣髴たり。

予は思ひぬ、紅塵萬丈の中に踟躕して何をか樂み何をか夢みん。悠々たる多摩の流と清き松風の音に慰みて、予は此里に隠れんかなと。

謂ふ勿れ厭世と、曾て厭世にはあらず、俗吏根性の文士、町人根性の操觚者と交はるが可厭になりたるなり。生存競争とは先輩に媚び、同儕を陥るゝものが強者か、自個の職を守り、馬鹿正直にして陥らるゝものは弱者か、伎倆も人格も除外せられて、圓轉滑脱を通り過ぎ、所謂内股膏藥なる荷厄介者の跳梁する世界が可厭になりたるなり。多摩は清くして美し、予若し此里に隠れ得べくんば、直ちに寓を此所に定めん。予若し俄に此里に隠れ能はざれば、雲らく去つて酒に隠れん。

自信なく、抱負なく、大不平なければ天下は太平なり。自個は平和なり。俗塵を浴びて俗物と伍するも畢竟其分のみ。何ぞ必らずしも松風蘿月を友とするの要あらんや、西行然り、宗祇然り、孔子は曾て筏に乗つて海に遊ばんと呷ちたり！

予は華嚴に赴くものにあらず、予は小不平のために死するものにあらず。才盡きても壽は盡きざらんことを願へ、功名何物ぞ、富貴何物ぞ、予は曾つて富貴と功名とを望まざるも、大自信あるなり、大抱負あるなり、更に大不平あるなり。然れども諸君には語らず、語るも其無益なるを知らばなり。

威猛高なる予の氣焰は同行の三子をして遂に口を緘ましめぬ。自信とは酔ふて管を巻く自信ならずや、抱負とはもつと酒が飲みたし

と云ふ抱負ならずや、不平とは着の既に盡きたる不平ならん。歸去來、日は既に暮なり。管を小田卷の繰返しても盡きざらんにと、三子は予を拉して出づ。酔歩蹒躑荆棘の間を過ぎ、蕨の未だ寸ならざるを把つて此を口にす、拾得もまた予が心を得たる男かな。

鏡に出で、予はまた高く唄ひぬ。唄ふどころ高雅なるものにあらず、さのさ節なり。尤も賤しき俗謡なり。女々しき新體詩は予の誦する柄になければなり。謠ふ可くんばそれ晚翠子の天地有情か！

約二里の間予は絶えず嘯りぬ、雲雀の如くに。ある時は鷺鳥にも似たりけん。多摩の河畔に佇みて物洗ふ女の、予が一行を見、更に予を見て笑ふこと荐りなり、予も亦高く笑ひぬ。何ぞ彼等の聲の大なるやと。日野の停車場に歸りて汽車に搭すれば、洋装の女あり、

ハンチングあり、丁髷あり、縞の羽織あり、俗氣紛々、予の大理想もこゝに全く破壊され、予が酔餘の氣焔は全く霧消し、一個長身瘦軀の遊民は再び都門を入るなりき。降るや涙雨！

滑稽小品終

大正二年三月廿五日印刷
大正二年四月二十一日發行

製複許不

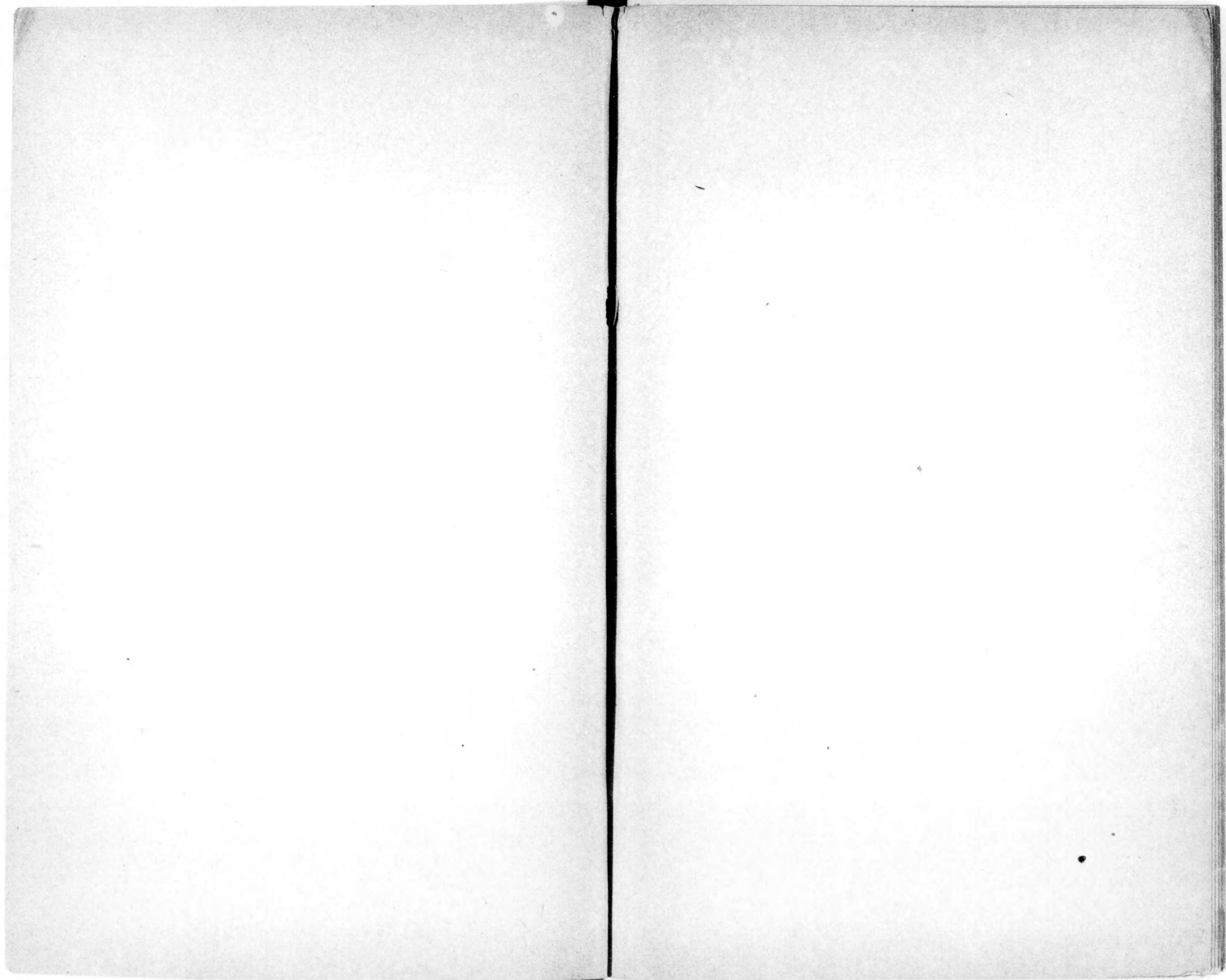
著者 武田櫻桃四郎
發行者 福岡新三
發行者 東京市神田區表神保町二番地
發行者 谷澤光吉
印刷者 關口誠信
東京市麹町區飯田町五丁目六番地

【錢拾四金價定】

—錢六稅郵—

所行發

東京市日本橋區松島町廿九番地
光世館書房
振替口座一九七九五番
東京市神田區表神保町二番地
福岡學海堂
振替口座一九〇四四番



272
745

終

